



TITLE:

船旅の種々相漫話

AUTHOR(S):

北村, 松治

CITATION:

北村, 松治. 船旅の種々相漫話. 天界 1932, 12(138): 357-357

ISSUE DATE:

1932-09-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162262>

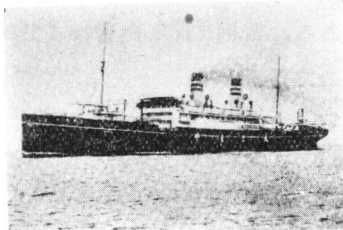
RIGHT:

船旅の種々相漫話

大和丸船長 北村松治

航海術には天文航法と平面航法との二方法があつて、大洋航海は天文航法に依り、天文航法は即ち地球の球面上に於て天體の蒼空に懸かる水平線とがなす高度を測量し、その時角を計上して位置を測定して行くもので、平面航法は即ち地球の面を平面と假定して、羅針盤の針路と航走距離とにより測定する推測航海法である。そして之は曇天で天體の顯出せぬときは此の法に依るほかない。またこ

れは比較的短距離の場合に應用するもので、内地臺灣間は此の平面法のみに依つても出来るが、天文航法は陸地を未だ望



大和丸

見し得ない先に船の位置を確定し得る。

そして熟練せる航海士官は自船の位置を僅かに半カイリ以内に確定することが出

来るから荒天の爲め

船體に風壓を及ぼした場合又は潮流の影響多き場所では天文航法によることは最も航跡の損失が少く便利である。臺灣と内地とは使用標準時に一時間の差があるが、此天文航法は毎日正午に當り子午線に合はして行くから毎日凡そ二十餘分づつ其航走距離に伴ふやうに時計の針を進めて行く。

測量に用ゐる天體は太陽大陰其他遊星恒星で、そして航海上に用ゐる星の數は合計三十六星位である。

船が五島列島に行きつくと、之を左舷に見て内方航路を取り、此處から愈々沿岸航海及び瀬戸内航海となるのであるが、これは平面航法と實物體航法を併用して行くのである。殊に狹隘な水路及び潮流の急激な場所は實物體航法に據らねばならんが、これは老練で經驗ある船長のみ出来得る仕事である。